

# 初級におけるスピーチスタイルの指導

岡 野 喜美子

キーワード

デス・マス体 くだけた話体 待遇意識 初級の学習領域

はじめに

待遇表現の教育については、それをあつかう時期やどこまであつかうかなどをめぐって、研究者および教科書作成者によりさまざまな考え方があ  
る。総じて近年は、待遇表現を初級から入れていこうとする方向により強  
く向かっていると同時に待遇表現自体も狭義の待遇表現（敬語）からより  
広義の待遇表現へと広がってきている。それは、日本語教育が文法教育中  
心からコミュニケーション能力の養成を重視する方向へ向かってきたこと  
と深くかかわっている。その広がりを持つ待遇表現の中で、本稿では、話  
体（speech style）の学習指導に焦点をあてて考察する。初級日本語教科  
書 Total Japanese において話しことばにおける文体（style）、すなわち話  
体の学習がどう段階的に指導されていくかを実例をもって明らかにすると  
ともに、話体学習によって学習者の待遇意識が高められていく過程を考え  
たい。

## 1. 待遇意識

21, 2 歳ぐらいの外国人学生をとりまく日本語環境は、主に、日本語教  
師、大学事務所や図書館の係の人、ホームステイ先の家族、友人、友人の  
家族、サークルなどの先輩・後輩、店員、通りすがりの人などであるが、

特に待遇表現の適切な使用が重大な意味をもつ場としてホームステイ先がある。これはことばの待遇上の間違いや丁寧度の不足が感情の行き違いをうみ、生活基盤そのものをあやうくすることも実際に大いにあるからである。ホームステイをしている「子供」である学生たちが、何かをしようとする際、いちいち「親」にことわらなくてもいいはずだという判断から、許可を得るというコミュニケーション行動をとらないこととか、「家族」なのだから親愛表現、すなわちくだけた文末表現を使っていいはずだといった価値観にもとづく言語行動をとることによって、本人の気づかぬうちに「親」にたいし礼を失した言動をし、人間関係をそこねている場合が見られる<sup>(1)</sup>。また、教室での教師にたいするくだけすぎたことば使いなど日本文化の中では受け入れがたい待遇上の問題もつねにわれわれ教師の経験するところである。このように、ホームステイの親や教師のような目上ばかりでなく、自分の回りをとりまく人々を言語上いかに遇するかを学ぶことが日本語学習の第1歩であり、重要な部分を占めているといっても過言ではない。第1課で導入される「おはようございます」ひとつをとっても、その意味を知っているだけでは十分でなく、「おはようございます」と言うべきか「おはよう」とだけ言っているのかは、待遇に関する判断なくしては決定できない。この判断をし、決定するのが待遇意識であり、日本語教育のはじめから育てていかなければならないものである。ここで育てるべき待遇意識とは、具体的にいうと、話す相手や話題の人物が目上か同等か目下か、丁寧に話すべきかどうかを即座に判定し、場の改まりの程度や親疎の関係などを的確に認識することである。Total Japaneseを作成するにあたって、筆者をふくめた著者たちは文法教育に筋を通す一方で、初級のはじめ、つまり、第1課から待遇表現教育に力を入れていくことをめざした。日本語の待遇意識のない、あるいはうすい学習者たちに初級の第1課からひとつひとつ談話の具体的な場や対人関係の中で目上とか改まりとか親疎などの理解力を高めていくことは可能であり、必要なことである。コミュニケーション能力を高める話しことば教育の中では、待

遇上の配慮なくしてはひとつも日本語を教えられないのである。

## 2. 待遇表現—話体の独立

Total Japanese では話しことばの待遇表現を大きく 3 分類する。伝統的な敬語の分類においては対者敬語である「です・ます」「でございます」を、尊敬語、謙譲語にならぶ丁寧語としてとらえるが、我々著者たちは対者敬語である「です・ます」の話体をくだけた話体であるダ体とともにスピーチスタイルとして別にたてた。つまり、話しことばを大きく丁寧体と普通体にわけたのである。したがって、敬語 *keego* の中にはデス・マス体などの文体（話体）を入れていない。これは、対者敬語（いわゆる丁寧語）と素材敬語（いわゆる尊敬語と謙譲語）を根本的にわけて教えるほうが上記二つの対立するスピーチスタイルの世界の存在が理解されやすく選択されやすくなることと、初級日本語においては、話体の使い分けが重要な学習対象となることによる。たとえば、下のような例文で(2)も(3)も(4)も同じ敬語として扱うことによって起こる理解の混乱を避けたためである。

- (1) 行った？
- (2) 行きましたか。
- (3) いらっしゃった？
- (4) いらっしゃいましたか。

一方、美化語、丁重語にあたるものを丁寧語として敬語 (honorifics) の中に分類した。本稿ではあつかわなかったが、広義の待遇表現の領域にふくまれると思われるその他の丁寧表現はいわゆるポライトネスの概念でくくれるものであり、初級の日本語の運用能力向上に大いにかかわる待遇表現として敬語とともに学習対象になっている。が、教科書の中でスピーチスタイルと敬語はそれぞれの範疇をもうけたが、丁寧表現はいろいろな丁寧さや待遇にかかわる表現や語句の集まりであり、そういう範疇を特に教科書の中にはもうけなかった。以上をまとめると、次のようになる。

## 待遇表現

- 1) speech style 話体
  - desu/masu style* デス・マス体または丁寧体
  - casual style of speech* くだけた話体, ダ体または普通体
- 2) keego (honorifics) 敬語
  - sonkeego* (respectful expressions) 尊敬語
  - kenjoogo* (humble expressions) 謙譲語
  - teeneego* (refined expressions) 丁寧語
- 3) politeness, polite expressions

### 3. 話体 speech style

普通体（普通形）ではなく、「です・ます」から導入するうえでの文法学習上の困難点は時に指摘される<sup>(2)</sup> ところであるが、日本以外の地で当面日本語によるコミュニケーションを必要としない学習環境の中であったら普通形から学習を始め、語形が入った時点で「です・ます」の学習をするのもひとつのやり方であろう。しかし、コミュニケーションを重視する立場からは学習の初日から使える日本語の学習をめざすべきである。その結果、Total Japanese では、日本語教科書の多くがそうであるように、話体 speech style としてデス・マス体 *desu/masu style* をまず導入している。正確には、下に見るように第1課で「です／ではありません／じゃありません」、第3課で「ます・ません」を導入している。学習者である大学生がはじめて人を紹介したり紹介されたり、教師やホームステイの「親」や友人の親のような目上と話したり、まだ十分よく知り合っていない学友と話したりする会話の世界は丁寧体の世界であり、会話の話体として、デス・マス体が待遇上もっともふさわしいと考えるからである。デス・マス体をまず使えるようにすることによって待遇上最も注意をはらうべき教師やホームステイの「親」、はじめて会う人への話体の定着をまずはかる。この段階では、くだけた話体（ダ体）は学習しない。初級の日本語学習のある時期、表現（使用）する日本語としてデス・マス体しか学習

しなくてもけっして偏っているとは言えないであろう。人々と知り合ってからまだ日も浅く、親密な関係にはない時期、しかも語彙も文型も表現も十分身についていない段階の話体としてデス・マス体が使われるのは当然である。この段階では、デス・マス体が何であるか、どう丁寧であるかなどを解説する必要を認めず、まったく触れていない。

このように、初級の教科書として主流の話体はデス・マス体であるものの、会話のすべてを「です・ます」でとおそうとするものではない。構文力がしだいにつき、丁寧体になじんだころ、つまり、全40課のうち第16課から、徐々にではあるが、くだけた話体を導入していく<sup>(3)</sup>。これは第15課、第16課で普通形 (plain forms) の現在、過去の肯定形・否定形と「～の／んです」が導入されるため、第16課で導入されるくだけた話体の学習が自然にやりやすくなるからである。「いそがしいの？」における終助詞「の」も「～ん／のです」との関連においてここで導入される。また、このころは自然と耳にする日本人のくだけた会話を理解しよう、したいという意欲が出てくる時期でもある。Total Japanese では、ここではじめて解説 (英文) の中で、くだけた話体 (普通体) との対比において、デス・マス体 (丁寧体) に触れることになる。最初は、ホームステイ先の「親」の話すくだけた話体に慣れる (理解する) ことから始め、いろいろな段階を経てだいたい初級の終わり近くなって、友人同士のくだけた会話を自身で発する (表現する) ことができるようにする。学生によっては、その言語環境 (たとえば、日本人の友人の有無) によって普通体を多用する者もいるし、丁寧体の世界を快適としてそれで通す者もいる。テレビのドラマやアニメ、マンガに関心をしめす者も出てくる。いずれにせよ、デス・マス体だけの世界からくだけた話体の世界へと理解と表現が広がっていく。一方、本稿では取り上げなかったが、教科書のデス・マス体の中での敬語使用場面も増え、より高度な待遇表現を使った会話も増えてくる。これらの時期はまたデス・マス体で話すべきところにくだけた話体を使用して待遇上の誤りをおかすことも多くなる時期である。適切な指導がなされな

かったロールプレイやスキットなどではとんでもないやりとりが飛び交う結果になることもある。ロールプレイやスキット学習では、話し手と聞き手の人間関係（上下、親疎）をしっかりと決めてから行うよう指導することがのぞまれる。

教科書の中ではスピーチレベル、特にくだけた話体の学習上の過程をとらえて段階的に導入するようにした。その過程をしめす会話例を順に載せる。

1 [場面] カレンが勉強している部屋にホームステイのお母さんが来る  
(16課)

お母さん： カレンさん、おもしろい番組、やってるけど、見に来ない？

カレン： あ、今はちょっと……。

お母さん： いそがしいの？

カレン： ええ、宿題がたくさんあるんです。それに、レポートも……。

お母さん： そう、それはたいへんね。ばんばってね。

カレン： はい。

このようなくだけた話体を使う目上（ホームステイのお母さん／お父さん／親戚のおじさん・先輩）とデス・マス体の留学生の会話は16課、26課、27課、29課に見られ、学習者は相手（目上）の話体にまどわされることなく、デス・マス体を使いつづけるようロールプレイでも指導される。

2 [場面] ジム、台所を使いたい (18課)

ジム： お母さん、あのう、お弁当を作りたいんですけど、〈ええ〉今台所、使ってもいいですか。

お母さん： あ、いいけど、ちょっと待って。すぐかたづけますね。

ジム : はい.  
お母さん : 何を作るの?  
ジム : サンドイッチです.  
お母さん : 材料は? 何か買ってきたの?  
ジム : パンとチーズを買ってきました.  
お母さん : あ, そう. 冷蔵庫の中にあるハムとかたまごとか使ってもいいですよ.  
ジム : あ, どうもすみません.

上のようなホームステイのお母さんの発話に見られるデス・マス体とくだけた話体の混用は18課のほか19課, 23課, 25課にもある. しかし, お母さんのスピーチレベル・シフトにまどわされることなく学生は一貫してデス・マス体で話すよう, ロールプレイでも指導する. この段階では, 学生はまだくだけた話体を使用することを要求されない.

3 [場面] ジムとみち子, マークの送別会の相談をする (33課)

ジム : あのう, マークの送別会のことなんだけど, 〈ええ〉あれ, どうなったんですか.  
みち子 : 森さんのアパートでやることになったんです.  
ジム : あ, 森さんの所で.  
みち子 : ええ. けさ大学に来る時, 森さんに会ったんだけど, その時, 相談して, そういうことになったんです.  
ジム : そう.  
みち子 : ええ, そのほうがゆっくりできるし, お金もあんまりかからないし.  
ジム : うん. で, いつやるの?  
みち子 : こないだマークさんに会った時, 来週ならいつでもいいって言ってたから, たぶん来週の土曜になると思うけ

ど、だいじょうぶ？

ジム : うん、だいじょうぶ。

みち子 : あ、それから、マークさんの希望でサークルの友だちも呼ぶことになったんだけど、かまわないでしょう？

ジム : あ、ぼくはぜんぜん……。

この友人同士の会話に見られるのはスピーチレベル・シフトの1例である。デス・マス体で話しはじめていて途中からくだけてくる現象は一般の会話でもよく観察される事例であり、友人同士の会話なら、学生たちが使用しても危険はない。

4 [場面] ジム、みち子を剣道の試合に誘う (36課)

ジム : みち子さん、今度の試合、見に来てくれる？

みち子 : ええ、もちろんそのつもりだけど。

ジム : ほんと？ よかった。ほかに、だれか来るかな。

みち子 : カレンさんたちも来ると思うけど。

ジム : あ、そう？ じゃあ、カレンさんに、もし来るんだったら、ビデオカメラを持ってきてもらいたいって言っというて。

みち子 : いいわよ。ジムさんはあたしたちとはいっしょに行けないの？

ジム : うん、先輩が1時間前に来いって言ってたから、先に行かなくちゃならないんだ。

みち子 : そう。試合が終わったら、みんなでどっか行く？

ジム : あ、いいね。行こうか。

上の会話はごく親しい同等の者同士のくだけた話体で、一貫して普通体である。39課にも同様の会話がある。このような会話を初級で表現（使



用) することを求めているかどうかは、学習者の能力、環境によると思われる。場合によっては理解程度にとどめてもよいし、希望によってはロールプレイで表現させてもよいであろう。

実際にくだけた話体が使われるのは、会話本冊の会話場面（全101場面）のうち、ホームステイ先16場面でもっとも多く、このほか、友人同士の会話3場面、先輩・後輩の間での2場面である。これらをもって多いとするか少ないとするかは一概に言えないが、練習テープなどによって聴解力を補って日常会話の理解と中級にそなえていくべきであろう。以上、文末の形式、話体を中心にして話体の組み合わせの典型例と段階的導入の実例を見てきた。課の進行とともに変わる話体の組み合わせや使い分けをある程度学習者に指導できるであろう。

#### 4. 話体の解説の実例

くだけた会話に関する解説（英文）は教科書中10回以上におよび、この中で、話し相手の目上がくだけた話体を使っても、学習者である学生にはデス・マス体でとおすようくりかえし注意を喚起している。日本に滞在するアメリカ人を中心にした学生は特に親愛表現、くだけた話体の方向に引きずられる傾向があるため、くりかえし指導する必要がある。一方、3. で見たように、友人関係では親密度が増すにつれ、デス・マス体からくだけた話体へとスピーチレベルが次第に変わっていくことなども解説されている。解説は学生向けであるが、同時に教師向けでもあり、教師がつねに場面や人間関係に合った待遇に留意して指導することがのぞまれる。文法シラバスだけで教えることに慣れた教師はとかく待遇面での指導に無頓着であったりするが、会話や談話練習の各会話に英語で与えられている場面（人間関係）の説明などをつねに念頭に入れて練習をしていくことが必要である。

以下、デス・マス体とくだけた話体に関する解説（英文解説）をその説明の現れる課とともに日本語でしるす。「です」「ます」についてはその諸形は1課から27課までの間に導入されている。文法的な導入にとどまり待遇上の解説のないものは「解説なし」とした。

#### 話体

- 1課 「N（名詞）です」「Nでは／じゃありません」（解説なし）
- 1課 他の人を紹介する際、地位が比較的同等である人（たとえば、きさくに話せる友人）に話す時には「～です」は省かれる。（例。こちら、山本さん。）
- 3課 「そう？」は目上には使えない。「そうですか」を使う。
- 3課 「～ます」「～ません」（解説なし）
- 4課 「～ました」「～ませんでした」（解説なし）
- 8課 「～でしょうか」は丁寧に聞く時、「～ですか」のかわりに使われる。ぶしつけさが少ないため、「～ですか」より丁寧であり、目上や見知らぬ人に話す時に使われる。
- 9課 「～いです」「～くないです／くありません」。「～くありません」は「～くないです」より改まった言い方である。
- 9課 「NA（な－形容詞）です」「NAではありません／じゃありません／ではないです／じゃないです」。「～ではありません」は他の否定形より改まった言い方であり、……「～じゃないです」は他の否定形よりくだけた言い方である。
- 12課 「N／NAでした」「N／NAでは／じゃありませんでした」「N／NAでは／じゃなかったです」（解説なし）
- 12課 「～かったです」「～くありませんでした／～なかったです」（解説なし）
- 16課 くだけた話体に関する解説(1)
  - 1. 日本語には二つの話体 speech style がある。これまで会話で使

われてきたものは *desu/masu* style であり、もう一方は *casual* style とよばれる。くだけた話体は家族、親しい友人のような同等の人の間で、あるいは目上から目下（たとえば上司から部下）へなどで使われる。文末には丁寧さをしめす「～です」「～ます」は使われず、plain form が使われる。くだけた話体では男性の話し手と女性の話し手の間に違いが見られ、文末が異なることがある。以下、例をしめす。

- (1) くだけた話体では疑問の終助詞「～か」は使わない。かわりに、昇り調子で「行く？」と言い、「行くか」は言わない。男性の話し手が「～か」を使うのを聞くことがあるかもしれないが、特別の場合である。
- (2) 「～の」はくだけた話体における終助詞である。昇り調子で発音される「～の？」は「～んですか」のくだけた言い方である。昇り調子の「～の？」は男女の話し手によって使われるが、下り調子の「～の」は主に女性と子供が用いる。
- (3) 「～ね」は女性によって、「～だね」はほとんど男性によって、時にある女性たちによって使われる。

2. くだけた話体はそれを使う前にいかに使われるかよく学習すべきである。くだけた話体が不適切に使われると、失礼に聞こえたり、ときに子供っぽく聞こえたりする。次のような場合には、くだけた話体は非常に失礼であると見なされる。

- (1) 目上、よく知らない人、またははじめて会った人に話す時
- (2) 授業中や会議のような改まった場面

目上に話す場合、目上がたとえくだけた話体を使ってもデス・マス体を使いつづけるべきである。自分が話している相手によって使われるべき話体が決定されることを忘れてはならない。

同等（たとえば、級友など）に話す場合、はじめは、デス・マス体を使っているが、親しくなるにつれ、くだけた話体に移行する。

- 18課 (2)「ちょっと待って」は目上には使えない。
- 19課 「～でもいいでしょうか」の「～でしょうか」は「～ですか」より丁寧である。
- 19課 「～ほうがいいでしょうね」における「～でしょうね」は和らいだ言い方で話し手の考えや意見を表現している。
- 23課 (3)「～のね」(女)／「～んだね」(男),「～わ」(女,若い女性は「～わ」のかわりに「～よ」を使う)／「～よ」(男女),「～てもらえる?」「～てもらえない?」(同等や目下に頼む時)
- 25課 「～てあげる」や「～てさしあげる」は他の人のためにすることを述べたい時,よほど注意して使わねばならない。特に,「～てあげましょうか」は出しゃばりに聞こえるので,使うべきでない。「～てさしあげましょうか」も同じ理由で使うべきでない。かわりに,「～ましょうか」と言う。
- 25課 「～てあげる(よ)」はくだけた話体で同等や目下にしか使えない。
- 27課 「来ない?」は同等や目下への誘いのことばである。
- 27課 (4)「～わね」(女)(最近は男女とも「～ね」),「～だよ」(男)／「～よ」(女)
- 27課 「うん／ううん」はくだけた会話で使われる。
- 27課 「～でしょう」「～だろう」(解説なし)
- 28課 (5)「～(ん)だって」(男女),「～ですって」(女),「～かな」(男女)／「～かしら」(女)
- 29課 「(行こ)う」はくだけた話体で使われる。
- 32課 昇り調子で言う「～でしょう?」は同等か目下に話す時にのみ使われる。出しゃばりに聞こえるので,目上にたいして使うと失礼になる。
- 35課 (6)「(行こ)う(か)」「～だろう(ね)」(男)／「～でしょう(ね)」(女),「～だろ(う)?」(男)／「～でしょ(う)?」(女)
- 35課 「～です」は丁寧さや礼儀をしめす。(下のような例で)目上と話

す時「～です」を使わないと失礼にあたる。(例.「ひま?」「どう?」「東京ドーム。」)

36課 「(し)ろ・(する)な」(男)

36課 初対面では同等の者(たとえば級友)と出会った時, デス・マス体を使うが, やがて自然にくだけた話体が変わっていく。これらの変化は, 教科書の中で登場人物の会話に見られる。目上にたいしては, よく知り合うようになって, デス・マス体に終始する。目上にたいするデス・マス体は冷淡さや疎遠を表すものではない。

37課 よく知らない人と話す時には, 適当な話体を注意深く選ぶ必要がある。親しい友人の友だちのような同等の人と話す時にも, よく知らない人の場合はデス・マス体を使う。

## 5. 普通体の世界と丁寧体の世界

現実の普通体(くだけた話体)の会話には多くの独特の語彙や言い回し, 終助詞, 音変化, 俗語, 卑語, 流行語などがあり, それらをすべてあつかおうとすれば膨大な教材が必要となる。Total Japanese で取り上げただけの話体とそれにとまなう記述は4. で見たようにくだけた話体で話される話しことばの特徴のほんの基本的な一部にすぎない。初級で学習指導されるべきものは, 話す相手によって正しい話体を選べること, 前述したような文末の特徴の代表的なものが理解または表現できることであり, それ以上は, 中級や上級の学習領域となろう。

丁寧体世界と普通体世界の違いについては, 文末が丁寧体か普通体かということだけではないのはもちろんである<sup>(4)</sup>。普通体世界で許される「飲みたい?」「あげようか。」「行くつもり?」のような表現も, それらにただ単に「です」「ます」をつけた下のような表現は丁寧体の世界では許されず, これらにかわる表現をとらなければならない。丁寧体であるがゆえの制約に注意しなければならないのである。

(1)\* コーヒー, 飲みたいです。

(2)\*これ、(さし)あげましょうか。

(3)\*どこへ行くつもりですか。

これらの制約は中級に入ってから学習するものではなく、それぞれの文型の運用上の問題として初級の中で学習指導されるべきであり、Total Japanese の中でもこれらをできるだけあつかっている。このほかにも、丁寧体の世界には敬語、丁寧表現が数多く現れ、学習すべき項目や留意点は増える傾向にあるのである。

## 6. 丁寧体の中のくだけた表現

丁寧体の会話というと、非常にかたい発話しかイメージしない人もいるし、また、そうした教科書もある。学習者の中には丁寧体を必要以上に忌避する者がおり、教師の中にも学生との親密さを強調してわざわざくだけた普通体で話そうとする者もいる。初級の教師は基本的にはデス・マス体で学生と話すべきであろう。実際のデス・マス体の会話には下の1)、2)に見られるような話しことばらしい特徴がかなり入っていて、自然で人工的でない日本語の世界を作り出している。Total Japanese でも、よほど改まった会話や報告以外、できるだけデス・マス体の発話の中に口頭表現に特徴的なこれらの要素を取り入れ、自然な会話を行えるよう指導している。

### 1) 口頭表現の特徴

音の変化	行かなく <u>ちゃ</u> いけないんです、 <u>見て</u> ますか、忘れ <u>ちゃ</u> いました、 <u>書い</u> ときました、そう <u>じゃ</u> ありません、連れて <u>っ</u> てください、 <u>～</u> て何ですか、あぶない <u>っ</u> て書いてありました、そうなん <u>で</u> す、寒い <u>ん</u> で窓を閉めました
助詞の省略	きのう学校行きました？
言いさし	まだなんです。先週忙しすぎて……。
倒置	ちょっと待ってください。今書きますから。
言いよどみ	あのう、ええと
あいづち	ええ、はい、そう

終助詞の使用　ね，ねえ，よ，よね

## 2) 普通体の使用

〔場面〕 秋山と同僚の原，会社を出ようとしている（37課）

原　：　あ，まだ降ってる。どうしよう。

秋山：　あれ？　原さん，かさ，ないんですか。

原　：　けさ銀行に行った時，かさ立てに入れといたら，だれかに持ってかれちゃったんです。

秋山：　え，取られたんですか。

原　：　ええ。何日か前に買ったばかりなんですよ。

秋山：　ひどいなあ。

これは丁寧体であるデス・マス体で話しているが，その中に普通体が入っている場合である。前出のスピーチレベル・シフトと違い，「まだ降ってる。どうしよう。」や「ひどいなあ。」など，モノローグ的な発話や感嘆文が自然と普通体の形で丁寧体の会話中に入ることにより，会話をかたくるしくなく和らいだ調子にしている。同様の例「～かな／かしら」が28課に見られるが，デス・マス体で話す仲であるなら，初級においてはレベル・シフトはこの程度にとどめておくのがよいであろう。

## 終わりに

以前，文法シラバスの教科書で教えていた時，学習者たちからつねに「会話を教えよ」の大合唱があった。今，会話を教える（正しくは，会話も教えるというべきであるが）教科書になってさすがにそういう要求が学習者たちから出ることはなくなった。会話も学習しているという満足感があるのであろう。しかし，自然でいきいきとした話しことばの導入にともなって大きく変わったのがかなりの量に増えた解説や練習である。デス・マス体の会話だけでなく，くだけた会話も教えるうえでのスピーチスタイルに関する解説の量も上の4.に見るとおりであるし，本稿では取り上げ

なかった話しことばの他の待遇表現、敬語や決まりことば、ポライトネスにかかわる解説や練習、語用論にもとづく解説や練習など初級レベルとはいえ学習上の負担は文法シラバスの教科書の比ではない。決められた授業時間の中でこれらを消化していくのは学習者、教師ともに大変な努力を要する。しかし、コミュニケーション能力を高め、場面に合った適切で自然な日本語表現力を身につけるには待遇上の習得をなおざりにすることはできない。初級学習者が膨大な待遇上の情報量に埋もれることなく、待遇意識を高めていくためには、今よりさらに整理され効果のある指導方法をさぐっていかねばならないであろう。

#### 注

- (1) 英語話者が、つきあいを重ねて親しみを感じる相手と雑談するときはことさらに familiar な話体を用いようとし、年上の日本語話者に違和感を持たせる傾向があり、逆に日本語話者にとって（中略）こうした待遇表現上の傾向の違いから来ていると思われる。（水谷1985）
- (2) 「デス・マス体」からはいる教育法は、文法的にみれば、日常生活の実用性に妥協して、「ダ体」からはいることのわかりやすさを犠牲にしていることを忘れてはならないであろう。（窪田・池尾1971）
- (3) 筆者は、初級のレベルで（中略）丁寧体から普通体への基礎的な切りかえの指導もこのレベルで必要だと思う。（ネウストプニー1978）
- (4) 鈴木睦（1997）

#### [参考文献]

- 窪田富男・池尾スミ（1971）「待遇表現」『日本語教育指導参考書2』文化庁  
窪田富男（1990）「敬語教育の基本問題（上）」『日本語教育指導参考書17』国立国語研究所  
——（1992）「敬語教育の基本問題（下）」『日本語教育指導参考書18』同上  
水谷信子（1985）「日英比較話しことばの文法」くろしお出版  
J.V. ネウストプニー（1978）「POLITENESS と日本語教育」『日本語教育』35号 日本語教育学会  
村岡貴子（1996）「文体の指導」『日本語学の世界』『日本語学』VOL.15 明治書院



- 山下秀雄(1989)「日本語教育における初級と待遇表現」『日本語教育』69号 日本語教育学会
- 山本富美子(1989)「待遇表現としての文体」同上
- 三牧陽子(1991)「待遇表現の体系的把握——日本語教育の視点から——」『日本語教育論集』学研
- 鈴木 睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版